

# 光栄の森

2021年9月 毎月1日発行 第157号  
発行者 光栄プロテック 中川

## 9月に向けて

代表取締役 三田雅憲

残暑が厳しく、また季節外れの大雨が続き、毎日大変ですが頑張っ夏を乗り切りましょう。

千葉白井工場では2回目の新型コロナワクチン接種が終わり、大阪本社でもようやく社員が新型コロナワクチン接種の予約が終わり少し安堵しています。

8/24よりパラリンピックが始まり、また選手たちの競技に感動が伝わっております。日本選手の活躍も素晴らしく、TVに目が離せません。そういう中でその選手たちを指導導いてこられた裏方のコーチや、特に監督にスポットをあてた故 野村克也監督の「エースの品格」から今月も一緒に学びたく思います。

### 「言葉を持たない指導者に監督の資格なし」

現在（当時）私が率いる東北楽天ゴールデンイーグルスには、数球団を渡り歩いてきたり、複数の監督に仕えてきた選手、コーチが何人かいる。彼らによると「最近ではミーティングを行う監督がいなくなった」そうである。キャンプが始まって5分か10分「頑張ろう」と一言訓示をたれてそれで終わりだと。それを聞いて私は愕然とした。そういう監督たちは、いったい何のために今の地位についたのか考えてみたことはあるのだろうか？ただ栄誉欲だけで引き受け、自己満足でもしているのか？監督の役割とは何か、そして義務とは何であるかを深く考えれば、そんな無責任な行動はとれないはずだ。プロ野球は元来が弱肉強食の競争社会であり、力のない者は容赦なく淘汰されてきた。そしてそのほとんどが「野球をとったら何もない」あるいは、そう思い込んでいる男たちである。決して華やかな面だけではない。厳しい商売だ。私は野球人である前に、一人の人間として彼らが引退した後のことも踏まえて、教育してやらねばならないと考え指導してきたつもりだ。

「人生」という字には様々な意味が込められている。「人として生まれる」「人として生きる」「人を生かす」「人に生かされる」それぞれの言葉を噛みしめ大切にしていかなければ、本当の意味で人生を送ったことにならないのではないかと？

また「人間形成は仕事を通じてなされる」と私は書いた。生きていくための基本的な知識や情操は家庭や学校で育まれるものだが、仕事を持つようになって初めて私たちは人生の意味を知るようになる。言い換えれば大人になっていくのである。野球が仕事ならば野球を通じて人生を知り、人間的に成長してこそ技術的進歩も実現するのである。私はこのような思いをどうすれば伝えることができるのかと試行錯誤を重ねながら言葉にしてきた。それが技術者としての責任だと自覚していたからだ。監督という職業の人間は、実際のプレーをもって選手たちに範を示すことはできない。つまり言葉を使って伝達するしか方法がないのである。それをミーティングひとつ行わないでどうやって導こうというのだろうか？言葉をもたない指導者など何者でもない。人間を預かり動かす地位にいることの自覚を持つ者だけが、監督になる資格があるのだ。」

と著書の中で述べられております。私を含め管理職や準管理職の立場にある方々は、十分に野村監督の言葉について考えてもらいたい。本当に部下のことを考えて助言できているか、波風を立てたくないからという理由で言うべきことを放置して迎合していないか、でもうまくやった時は褒めて自信を持たせているか、等々。前に立っている人間でその組織は如何様にも変わっていく。だからこそ前に立つ者（監督・リーダー・上長）がいろいろな人生を学び、下を導くことが大切である。そのためには言葉が必要であることを言われているのだと思います。

9月3日には、いよいよ千葉白井第二工場が竣工式（火入れ式）を私も立合いのもと開催されます。千葉の諸君にはこれまで以上にお願ひしたいし、大阪本社も千葉の諸君の見本になるように共に切磋琢磨して頑張ってもらいたく思います。